

# 天草版『エソポのハブラス』の助動詞の語彙

— 国字本『伊曾保物語』・天草版『平家物語』との比較を通して —

濱千代 いづみ

キーワード：エソポのハブラス 助動詞 基幹語彙 話し言葉 ごとし

## 1 はじめに

本研究の目的は天草版『エソポのハブラス』の助動詞の語彙を、国字本『伊曾保物語』・天草版『平家物語』との比較を通して計量的な観点から分析し、特色を把握することである。

天草版『エソポのハブラス』及び天草版『平家物語』は『金句集』と合わせ綴じた形で出版され、1593年の総序を持つ。ただし、天草版『エソポのハブラス』の扉の刊行年は1593年であるが、天草版『平家物語』の扉・序の刊行年は1592年である。大英図書館に唯一本が伝存されているのみの、天下の孤本である。天正遣欧少年使節がもたらした活版印刷機によって天草学林（コレジヨ）で印刷され、ポルトガル語式の写音法によるローマ字で日本語が綴られている。『エソポのハブラス』はイソップの生涯と数々の寓話とで構成され、それを室町時代末期の話し言葉に翻訳してある。イエズスの宣教師たちが日本語の学習をするためのテキストとして、また布教の際に引用する拠り所として編集された。天草版『平家物語』は古典の平家物語を室町時代末期の話し言葉に書き直してあり、喜一検校と右馬の允の二人が対話する形式で進行する。イエズスの宣教師たちが日本の言葉と歴史とを学習するためのテキストとして編集された。

国字本『伊曾保物語』は少なくとも十種の版本があり、写本も存することから近世初期によく読まれたと推されるが、みな同じ系統といえる。<sup>(注1)</sup>天草版『エソポのハブラス』との関係では共通の祖本として広本の文語本が存したであろうと考えられる。しかし、天草版の下巻に相当する部分は国字本・天草版の収録寓話の異同が大きい。遠藤潤一氏はこの部分に関して、天草版が共通の祖本によらず、16世紀ヨーロッパにおいて標準的で権威あるラテン語本によったとして<sup>(注2)</sup>いる。国字本全体は文語文が基調で、話し言葉を含んでいる。

天草版『エソポのハブラス』及び天草版『平家物語』は「扉・序・物語の本文・目録」

の四部によって構成されている。このうちの物語の本文に使われている助動詞を調査の対象とする。計量に利用した文献は次のものである。

- a 『エソポのハブラス本文と総索引』
- b 『仮名草子伊曾保物語用語索引』
- c 『天草版平家物語語彙用例総索引』

これらは共通の方針と基準の下に作成してあるわけではない。文献aと文献cは近いが、文献bは離れている。そこで、単語の認定の基準を一致させるようにして計量した。

天草版『エソポのハブラス』及び天草版『平家物語』の本文の引用は漢字仮名交じりに直して示す。国字本『伊曾保物語』の本文の引用は日本古典文学大系『仮名草子集』に依拠する。

また、次の略称を用いる。

- 〈エソポ〉〈エ〉・・・天草版『エソポのハブラス』
- 〈伊曾保〉〈伊〉・・・国字本『伊曾保物語』
- 〈ヘイケ〉〈へ〉・・・天草版『平家物語』

## 2 助動詞の語彙の全体像

### 2.1 助動詞の異なり語数と延べ語数

〈エソポ〉〈伊曾保〉〈ヘイケ〉の物語の本文に用いられている助動詞について、異なり語数・延べ語数を計量し、1語あたりの使用度数を計算して示すと表1ようになる。

異なり語数・延べ語数ともに、室町時代末期の話し言葉を使用している〈ヘイケ〉がもっとも多く、同様の〈エソポ〉がもっとも少ない。話し言葉を含んだ文語文の〈伊曾保〉がその中間にある。1語あたりの使用度数でも〈ヘイケ〉が多く、〈エソポ〉が少ないが、〈エソポ〉と〈伊曾保〉とは近い数値である。

表1 助動詞の異なり語数と延べ語数

文献	〈エソポ〉	〈伊曾保〉	〈ヘイケ〉
異なり語数	27	34	41
延べ語数	1937	2497	11338
1語あたりの使用度数	71.74	73.44	276.54

ここで、作品の規模と助動詞の使用との関係を考えてみよう。

〈エソポ〉の物語の本文は409ページから502ページまでの94ページである。〈ヘイ

ケ)の本文は3ページから408ページまでの406ページである。1ページあたり24行という同じ組み方で印刷し、合わせ綴じてあるので、物語の本文のページ数が作品の規模を表しているときみなせる。〈エソポ〉の94ページを1とすると〈ヘイケ〉の406ページは4.3になる。〈ヘイケ〉は〈エソポ〉の4.3倍の規模の作品ということになる。

表1の1語あたりの使用度数は、延べ語数を異なり語数で除した数値である。これで比較すると、〈ヘイケ〉の276.54は〈エソポ〉の71.74の3.9倍となり、作品の規模の4.3倍に近くなる。助動詞の1語あたりの使用度数は作品の規模に比例するといえる。

ところで、表1の延べ語数で比較すると、〈ヘイケ〉の11338は〈エソポ〉の1937の5.9倍になり、作品の規模の4.3倍より倍率が大きくなる。また、1ページあたりの助動詞の使用度数を計算すると、〈エソポ〉は20.61、〈ヘイケ〉は27.93となり、〈ヘイケ〉の方が多くなる。よって、〈エソポ〉は〈ヘイケ〉に比べて助動詞の使用が少ないといえる。

語彙量の判明している〈ヘイケ〉と『平家物語』〈高野本〉(略称として〈高野本〉〈高〉を用いる<sup>(注5)</sup>)ではどうであろうか。

〈ヘイケ〉〈高野本〉の物語の本文の語彙について異なり語数・延べ語数を示すと表2のようになる<sup>(注6)</sup>。

表2 〈ヘイケ〉〈高野本〉の語彙量

文献		〈ヘイケ〉	〈高野本〉
異なり語数	自立語	7419	14750
	付属語(助動詞)	41	37
	付属語(助詞)	84	87
	全体	7544	14874
延べ語数	自立語	46893	99386
	付属語(助動詞)	11338	20131
	付属語(助詞)	32126	56434
	全体	90357	175951
1語あたりの使用度数	自立語	6.32	6.74
	付属語(助動詞)	276.54	544.08
	付属語(助詞)	382.45	648.67
	全体	11.98	11.83

〈ヘイケ〉と〈高野本〉の場合、延べ語数の全体が作品の規模を表しているともなしでよい。〈ヘイケ〉の90357を1とすると〈高野本〉の175951は1.9になる。〈高野本〉は〈ヘイケ〉の1.9倍の語彙量の作品だといえる。

1語あたりの使用度数で比較すると、付属語（助動詞）の場合、〈ヘイケ〉の276.54に対して〈高野本〉の544.08は2.0倍である。付属語（助詞）の場合、〈ヘイケ〉の382.45に対して〈高野本〉の648.67は1.7倍である。ともに作品の規模の1.9倍という倍率に近くなる。付属語における1語あたりの使用度数は作品の規模に比例するといえる。

では、自立語の場合はどうであろうか。1語あたりの使用度数で見ると〈ヘイケ〉の6.32と〈高野本〉の6.74に大差はない。しかし、異なり語数で見ると〈ヘイケ〉の7419に対して〈高野本〉の14750は2.0倍となる。また、延べ語数で見ても〈ヘイケ〉の46893に対して〈高野本〉の99386は2.1倍となり、ともに作品の規模の1.9倍に近くなる。自立語の場合、異なり語数と延べ語数が作品の規模に比例するといえよう。

助動詞の使用率を計算すると〈ヘイケ〉が125.48パーミル、〈高野本〉が114.41パーミルになる。双方の助動詞の使用は同程度である。表1の検討の結果と照合すると、〈エソボ〉は〈高野本〉より助動詞の使用が少ないといえる。

## 2.2 助動詞の使用語彙

〈エソボ〉〈伊曾保〉〈ヘイケ〉〈高野本〉の物語の本文に用いられている助動詞の語彙を主たる意味によって分類し、番号を付した。

### 【主たる意味と番号の範囲】

受身1～2 使役3～5 完了6～10 過去11～12 推量13～22  
過去推量23 伝聞推定24 打消25 打消推量26～28 断定29～32  
希望33～34 比況35 打消過去36 様態的推定37 複合語38～48  
それを〈エソボ〉に存するもの、〈伊曾保〉に存するもの、〈ヘイケ〉に存するものの順に並べ替えて示すと表3のようになる。

### 【見出しの助動詞の有無】

見出しの助動詞の存する場合・・・○

見出しの助動詞の存しない場合・・・×

古語辞典（略称を〈古語〉とする）<sup>（注1）</sup>の巻末付録の一覧表に掲示してある助動詞も併せて示す。古語辞典は高等学校で教える古典文法をよく整理して反映している。古典語の学校文法は平安時代を基準にして記述してある。

表3 〈エ〉〈伊〉〈へ〉〈高〉の助動詞の使用語彙

主たる意味	番号	助動詞	エソボ	伊曾保	へイケ	高野本	古語
受身	1	る	○	○	○	○	○
受身	2	らる	○	○	○	○	○
使役	3	す	○	○	○	○	○
使役	4	さす	○	○	○	○	○
完了	6	つ	○	○	○	○	○
完了	9	たり	○	○	○	○	○
完了	10	た	○	○	○	○	×
過去	11	き	○	○	○	○	○
推量	14	う	○	○	○	○	×
推量	20	べし	○	○	○	○	○
打消	25	ず	○	○	○	○	○
打消推量	26	じ	○	○	○	○	○
打消推量	27	まじ	○	○	○	○	○
断定	29	たり	○	○	○	○	○
断定	30	なり	○	○	○	○	○
希望	33	たし	○	○	○	○	○
比況	35	ごとし	○	○	○	○	○
複合語	43	やうなり	○	○	○	○	○
複合語	45	さうなり	○	○	○	×	×
複合語	47	ごとくなり	○	○	○	○	○
推量	16	うず	○	×	○	○	×
推量	19	らう	○	×	○	×	×
打消推量	28	まい	○	×	○	×	×
断定	31	ぢや	○	×	○	×	×
打消過去	36	なんだ	○	×	○	×	×
複合語	48	ごとくぢや	○	×	○	×	×
断定	32	であ	○	×	×	×	×
使役	5	しむ	×	○	○	○	○

完了	7	ぬ	×	○	○	○	○
完了	8	り	×	○	○	○	○
過去	12	けり	×	○	○	○	○
推量	13	ん(む)	×	○	○	○	○
推量	18	らん(らむ)	×	○	○	○	○
推量	21	まし	×	○	○	○	○
推量	22	めり	×	○	○	○	○
過去推量	23	けん(けむ)	×	○	○	○	○
伝聞推定	24	なり	×	○	○	○	○
希望	34	まほし	×	○	○	○	○
様態的推量	37	げな	×	○	○	×	×
推量	15	むず(んず)	×	○	×	○	○
複合語	39	てんげり	×	○	×	○	×
推量	17	ようず	×	×	○	×	×
複合語	44	やうちや	×	×	○	×	×
複合語	46	さうちや	×	×	○	×	×
複合語	38	てんぎ	×	×	×	○	×
複合語	40	たんなり	×	×	×	○	×
複合語	41	べかんなり	×	×	×	○	×
複合語	42	まじかんなり	×	×	×	○	×
異なり語数	48		27	34	41	37	

(注)「う」と「ん(む)」、「うず」と「むず(んず)」、「らう」と「らん(らむ)」は国字・ローマ字ともに表記に従い別語として扱った。

〈エソボ〉〈伊曾保〉に共通に存するのは「る」「らる」から「さうなり」「ごとくなり」までの20語である。これらは〈ヘイケ〉にも存する。室町時代末期の口語的文脈でも文語的文脈でも用いられた語群である。このうち「さうなり」は〈高野本〉に存せず、さらに「た」「う」が〈古語〉に掲載されていない。<sup>(注8)</sup>これらの3語は主として口語的文脈で用いられたものである。四本全部と〈古語〉に共通するのは、先に挙げた20語のうち「た」「う」「さうなり」の3語を除く17語である。使用の多少はともかく、これらの17語は平安時代から江戸時代初期まで用いられていた語群である。

〈エソボ〉にあって〈伊曾保〉に存しないのは「うず」「らう」「まい」「ぢや」「なんだ」「ごとくぢや」「であ」の7語である。これらはすべて〈古語〉に掲載されていない。そのうち「うず」は〈ヘイケ〉〈高野本〉にもあるので〈伊曾保〉にのみ存しない。「うず」は比較的早い時期に用いられるようになったが、口語的文脈が主であったと考えられる。「であ」は〈ヘイケ〉〈高野本〉にもないので〈エソボ〉固有のものである。これは「である」の略で、「ぢや」に転じる過渡期の語形である。「らう」「まい」「ぢや」「なんだ」「ごとくぢや」の5語は〈ヘイケ〉にもある。これらの5語は室町時代末期の口語的文脈でよく用いられた語群である。

〈伊曾保〉にあって〈エソボ〉にないのは「しむ」「ぬ」から「むず(んず)」「てんげり」までの14語である。そのうち「しむ」「ぬ」「り」「けり」「ん(む)」「らん(らむ)」「まし」「めり」「けん(けむ)」「なり〈伝聞推定〉」「まほし」の11語は〈ヘイケ〉〈高野本〉にもあり、〈古語〉にも掲載されている。〈エソボ〉でのみ見られない。これらは文語的文脈での使用が主であろうと考えられる。残りの3語「げな」「むず(んず)」「てんげり」のうち、「げな」は〈ヘイケ〉にあるが、〈古語〉に掲載されていない。これは接尾語に由来する「げ」に断定の助動詞「なり」の変化したものが付いてできた語で、様態を推測する意味を表す。室町時代から見られるものである。「た」「う」「さうなり」と同様、〈伊曾保〉の文語を基調とした中の口語性を示す助動詞である。「むず(んず)」は〈高野本〉にもあり、〈古語〉に掲載されている。〈エソボ〉〈ヘイケ〉では「うず」を用いている。『ロドリゲス日本大文典』では「むず(んず)」を書き言葉の用法の助辞として扱っている。<sup>(注9)</sup>「てんげり」は〈高野本〉にあるが、〈古語〉に掲載されていない。これは完了の助動詞「つ」の連用形「て」に過去の助動詞「けり」の付いた「てけり」が変化したものである。軍記物語や説話によく用いられた。しかし、室町時代には文語的文脈での使用が主になったと考えられる。

〈エソボ〉〈伊曾保〉二本に共通して存しないのは「ようず」から「まじかんなり」までの7語である。すべて音韻変化を伴う複合語である。そのうち「ようず」「やうちや」「さうちや」の3語は〈ヘイケ〉にのみあり、「てんぎ」「たんなり」「べかんなり」「まじかんなり」の4語は〈高野本〉にのみある。

### 3 〈エソボ〉〈伊曾保〉〈ヘイケ〉の助動詞の使用度数と基幹語彙

#### 3.1 〈エソボ〉の助動詞の使用度数

〈エソボ〉の助動詞を使用度数の多いものから順に整列し、度数と使用率とを示すと表4のようなになる。比較のために〈伊曾保〉〈ヘイケ〉の助動詞の度数と使用率とを付

した。

表4 〈エソポ〉の助動詞の使用度数と使用率

見出し語	意味	エソポ 順位	エソポ 度数	エソポ 使用率	伊曾保 順位	伊曾保 度数	伊曾保 使用率	ヘイケ 順位	ヘイケ 度数	ヘイケ 使用率
た	完了	1	527	272.07	29	1	0.40	1	2865	252.69
ぢや	断定	2	220	113.58		0	0	5	747	65.88
ず	打消	3	177	91.38	3	253	101.32	6	703	62.00
らる	受身	4	172	88.80	13	32	12.82	2	1504	132.65
う	推量	5	138	71.24	29	1	0.40	7	670	59.09
うず	推量	6	136	70.21		0	0	8	589	51.95
る	受身	7	126	65.05	9	78	31.24	3	1385	122.16
たり	完了	8	93	48.01	7	114	45.65	4	955	84.23
なり	断定	9	73	37.69	2	325	130.16	10	335	29.55
す	使役	10	72	37.17	10	60	24.03	9	514	45.33
まじ	打消推量	11	37	19.10	17	15	6.01	14	89	7.85
さす	使役	12	29	14.97	14	31	12.41	11	254	22.40
なんだ	打消過去	13	27	13.94		0	0	12	151	13.32
ごとし	比況	14	25	12.91	8	102	40.85	20	26	2.29
やうなり	複合語	15	21	10.84	19	13	5.21	13	129	11.38
まい	打消推量	16	18	9.29		0	0	15	84	7.41
つ	完了	17	12	6.20	15	17	6.81	18	49	4.32
ごとなり	複合語	18	9	4.65	22	9	3.60	24	16	1.41
たし	希望	19	7	3.61	23	8	3.20	19	27	2.38
ごとくちや	複合語	19	7	3.61		0	0	30	4	0.35
らう	推量	21	4	2.07		0	0	16	62	5.47
べし	推量	22	2	1.03	5	220	88.11	17	51	4.50
き	過去	23	1	0.52	12	48	19.22	21	24	2.12
たり	断定	23	1	0.52	15	17	6.81	28	6	0.53
じ	打消推量	23	1	0.52	20	12	4.81	25	12	1.06
さうなり	複合語	23	1	0.52	29	1	0.40	22	19	1.68
であ	断定	23	1	0.52		0	0		0	0
けり	過去		0	0	1	695	278.33	25	12	1.06
ん(む)	推量		0	0	4	221	88.51	27	7	0.62
ぬ	完了		0	0	6	126	50.46	23	17	1.50
り	完了		0	0	11	49	19.62	37	2	0.18
けん(けむ)	過去推量		0	0	18	14	5.61	30	4	0.35
しむ	使役		0	0	20	12	4.81	33	3	0.26
むず(んず)	推量		0	0	23	8	3.20		0	0
まほし	希望		0	0	25	4	1.60	33	3	0.26
まし	推量		0	0	26	3	1.20	38	1	0.09
めり	推量		0	0	26	3	1.20	38	1	0.09
てんげり	複合語		0	0	28	2	0.80		0	0
らん(らむ)	推量		0	0	29	1	0.40	28	6	0.53
げな	様態的推量		0	0	29	1	0.40	33	3	0.26
なり	伝聞推定		0	0	29	1	0.40	38	1	0.09
やうちや	複合語		0	0		0	0	30	4	0.35
さうちや	複合語		0	0		0	0	33	3	0.26
ようず	推量		0	0		0	0	38	1	0.09



### 3.2 〈エソボ〉の助動詞の基幹語彙

ある言語資料を対象とした語彙調査を行った場合に得られる、骨格的部分集団を「基幹語彙」と呼ぶことにする。使用率の高い語がその資料の基幹語になる。大野晋氏は「基本語彙」という語を用いて、自立語を集計し、使用率0.1パーミル以上の語の集合とするという考えを提示された<sup>(E10)</sup>。近藤政美氏は〈ヘイケ〉の助動詞の基幹語彙を考察するにあたり、以下のように基準を設定した<sup>(E11)</sup>。

- (i) 高位語 (第一)  $50.00 \leq \alpha$       …… 第一基幹語彙
  - (ii) 高位語 (第二)  $5.00 \leq \alpha < 50.00$       …… 第二基幹語彙
  - (iii) 中位語  $0.50 \leq \alpha < 5.00$
  - (iv) 低位語  $0.00 < \alpha < 0.50$
  - (v) 不使用  $\alpha = 0.00$
- $\alpha$ の単位はパーミル (‰)

これをそのまま〈エソボ〉の助動詞の語彙に応用するわけにはいかない。そこで、次のような基準を設定した。

- (S) ランク  $50.00 \leq \alpha$
  - (A) ランク  $10.00 \leq \alpha < 50.00$
  - (B) ランク  $1.00 \leq \alpha < 10.00$
  - (C) ランク  $0.00 < \alpha < 1.00$
  - 「不使用」  $\alpha = 0.00$
- $\alpha$ の単位はパーミル (‰)

表4において(S)ランクは、順位1の「た」から順位7の「る」までの7語である。これらの使用度数はきわめて多く、使用率も高い。累積使用度数は1496で、助動詞全体の772.33%に相当する。また(A)ランクは、順位8の「たり」から順位15の「やうなり」までの8語である。(A)ランクまでの累積使用度数は1873で、助動詞全体の966.96%に相当する。これを〈エソボ〉の助動詞の基幹語彙とする。

### 3.3 〈伊曾保〉の助動詞の使用度数と基幹語彙

〈伊曾保〉の助動詞を使用度数の多いものから順に整列し、度数と使用率とを示すと表5ようになる。

表5 〈伊曾保〉の助動詞の使用度数と使用率

見出し語	意味	エソポ 順位	エソポ 度数	エソポ 使用率	伊曾保 順位	伊曾保 度数	伊曾保 使用率	ヘイケ 順位	ヘイケ 度数	ヘイケ 使用率
けり	過去		0	0	1	695	278.33	25	12	1.06
なり	断定	9	73	37.69	2	325	130.16	10	335	29.55
ず	打消	3	177	91.38	3	253	101.32	6	703	62.00
ん(む)	推量		0	0	4	221	88.51	27	7	0.62
べし	推量	22	2	1.03	5	220	88.11	17	51	4.50
ぬ	完了		0	0	6	126	50.46	23	17	1.50
たり	完了	8	93	48.01	7	114	45.65	4	955	84.23
ごとし	比況	14	25	12.91	8	102	40.85	20	26	2.29
る	受身	7	126	65.05	9	78	31.24	3	1385	122.16
す	使役	10	72	37.17	10	60	24.03	9	514	45.33
り	完了		0	0	11	49	19.62	37	2	0.18
き	過去	23	1	0.52	12	48	19.22	21	24	2.12
らる	受身	4	172	88.80	13	32	12.82	2	1504	132.65
さす	使役	12	29	14.97	14	31	12.41	11	254	22.40
つ	完了	17	12	6.20	15	17	6.81	18	49	4.32
たり	断定	23	1	0.52	15	17	6.81	28	6	0.53
まじ	打消推量	11	37	19.10	17	15	6.01	14	89	7.85
けん(けむ)	過去推量		0	0	18	14	5.61	30	4	0.35
やうなり	複合語	15	21	10.84	19	13	5.21	13	129	11.38
じ	打消推量	23	1	0.52	20	12	4.81	25	12	1.06
しむ	使役		0	0	20	12	4.81	33	3	0.26
ごとくなり	複合語	18	9	4.65	22	9	3.60	24	16	1.41
たし	希望	19	7	3.61	23	8	3.20	19	27	2.38
むず(んず)	推量		0	0	23	8	3.20		0	0
まほし	希望		0	0	25	4	1.60	33	3	0.26
まし	推量		0	0	26	3	1.20	38	1	0.09
めり	推量		0	0	26	3	1.20	38	1	0.09
てんげり	複合語		0	0	28	2	0.80		0	0
た	完了	1	527	272.07	29	1	0.40	1	2865	252.69
う	推量	5	138	71.24	29	1	0.40	7	670	59.09
さうなり	複合語	23	1	0.52	29	1	0.40	22	19	1.68
らん(らむ)	推量		0	0	29	1	0.40	28	6	0.53
げな	様態的推量		0	0	29	1	0.40	33	3	0.26
なり	伝聞推定		0	0	29	1	0.40	38	1	0.09
ちや	断定	2	220	113.58		0	0	5	747	65.88
うず	推量	6	136	70.21		0	0	8	589	51.95
なんだ	打消過去	13	27	13.94		0	0	12	151	13.32
まい	打消推量	16	18	9.29		0	0	15	84	7.41
ごとくちや	複合語	19	7	3.61		0	0	30	4	0.35
らう	推量	21	4	2.07		0	0	16	62	5.47
であ	断定	23	1	0.52		0	0		0	0
やうちや	複合語		0	0		0	0	30	4	0.35
さうちや	複合語		0	0		0	0	33	3	0.26
ようず	推量		0	0		0	0	38	1	0.09

表5において(S)ランクは、順位1の「けり」から順位6の「ぬ」までの6語である。その累積使用度数は1840で、助動詞全体の736.88%に相当する。また(A)ランクは、順位7の「たり」から順位14の「さす」までの8語である。(A)ランクまでの累積使用度数は2354で、助動詞全体の942.73%に相当する。これを〈伊曾保〉の助動詞の基幹語彙とする。

### 3.4 〈ヘイケ〉の助動詞の使用度数と基幹語彙

〈ヘイケ〉の助動詞を使用度数の多いものから順に整列し、度数と使用率とを示すと表6のようになる。

表6 〈ヘイケ〉の助動詞の使用度数と使用率

見出し語	意味	エソポ 順位	エソポ 度数	エソポ 使用率	伊曾保 順位	伊曾保 度数	伊曾保 使用率	ヘイケ 順位	ヘイケ 度数	ヘイケ 使用率
た	完了	1	527	272.07	29	1	0.40	1	2865	252.69
らる	受身	4	172	88.80	13	32	12.82	2	1504	132.65
る	受身	7	126	65.05	9	78	31.24	3	1385	122.16
たり	完了	8	93	48.01	7	114	45.65	4	955	84.23
ちや	断定	2	220	113.58		0	0	5	747	65.88
ず	打消	3	177	91.38	3	253	101.32	6	703	62.00
う	推量	5	138	71.24	29	1	0.40	7	670	59.09
うず	推量	6	136	70.21		0	0	8	589	51.95
す	使役	10	72	37.17	10	60	24.03	9	514	45.33
なり	断定	9	73	37.69	2	325	130.16	10	335	29.55
さす	使役	12	29	14.97	14	31	12.41	11	254	22.40
なんだ	打消過去	13	27	13.94		0	0	12	151	13.32
やうなり	複合語	15	21	10.84	19	13	5.21	13	129	11.38
まじ	打消推量	11	37	19.10	17	15	6.01	14	89	7.85
まい	打消推量	16	18	9.29		0	0	15	84	7.41
らう	推量	21	4	2.07		0	0	16	62	5.47
べし	推量	22	2	1.03	5	220	88.11	17	51	4.50
つ	完了	17	12	6.20	15	17	6.81	18	49	4.32
たし	希望	19	7	3.61	23	8	3.20	19	27	2.38
ごとし	比況	14	25	12.91	8	102	40.85	20	26	2.29
き	過去	23	1	0.52	12	48	19.22	21	24	2.12
さうなり	複合語	23	1	0.52	29	1	0.40	22	19	1.68
ぬ	完了		0	0	6	126	50.46	23	17	1.50
ごとくなり	複合語	18	9	4.65	22	9	3.60	24	16	1.41
じ	打消推量	23	1	0.52	20	12	4.81	25	12	1.06
けり	過去		0	0	1	695	278.33	25	12	1.06
ん(む)	推量		0	0	4	221	88.51	27	7	0.62
たり	断定	23	1	0.52	15	17	6.81	28	6	0.53
らん(らむ)	推量		0	0	29	1	0.40	28	6	0.53
ごとくちや	複合語	19	7	3.61		0	0	30	4	0.35
けん(けむ)	過去推量		0	0	18	14	5.61	30	4	0.35
やうちや	複合語		0	0		0	0	30	4	0.35
しむ	使役		0	0	20	12	4.81	33	3	0.26
まほし	希望		0	0	25	4	1.60	33	3	0.26
げな	様態的推量		0	0	29	1	0.40	33	3	0.26
さうちや	複合語		0	0		0	0	33	3	0.26
り	完了		0	0	11	49	19.62	37	2	0.18
まし	推量		0	0	26	3	1.20	38	1	0.09
めり	推量		0	0	26	3	1.20	38	1	0.09
なり	伝聞推定		0	0	29	1	0.40	38	1	0.09
ようず	推量		0	0		0	0	38	1	0.09
であ	断定	23	1	0.52		0	0		0	0
むず(んず)	推量		0	0	23	8	3.20		0	0
てんげり	複合語		0	0	28	2	0.80		0	0

表6において(S)ランクは、順位1の「た」から順位8の「うず」までの8語である。その累積使用度数は9418で、助動詞全体の830.66%に相当する。また(A)ランクは、順位9の「す」から順位13の「やうなり」までの5語である。(A)ランクまでの累積使用度数は10801で、助動詞全体の952.64%に相当する。これを〈ヘイケ〉の助動詞の基幹語彙とする。

#### 4 基幹語彙の観点による〈伊曽保〉〈ヘイケ〉の助動詞との比較

##### 4.1 基幹語彙による分類

〈エソボ〉〈伊曽保〉〈ヘイケ〉の助動詞を、全部で基幹語彙のもの、2作品で基幹語彙のもの、1作品でのみ基幹語彙のものという視点で整理して示すと次のようになる。

###### (1) 全部で基幹語彙のもの

- 〈エ〉(S)、〈伊〉(S)、〈へ〉(S)・・・「ず」
- 〈エ〉(S)、〈伊〉(A)、〈へ〉(S)・・・「らる」「る」
- 〈エ〉(A)、〈伊〉(S)、〈へ〉(A)・・・「なり〈断定〉」
- 〈エ〉(A)、〈伊〉(A)、〈へ〉(S)・・・「たり〈完了〉」
- 〈エ〉(A)、〈伊〉(A)、〈へ〉(A)・・・「す」「さす」

###### (2) 〈エソボ〉〈伊曽保〉で基幹語彙であるが〈ヘイケ〉でそうでないもの

- 〈エ〉(A)、〈伊〉(A):〈へ〉(B)・・・「ごとし」

###### (3) 〈エソボ〉〈ヘイケ〉で基幹語彙であるが〈伊曽保〉でそうでないもの

- 〈エ〉(S)、〈へ〉(S):〈伊〉(C)・・・「た」「う」
- 〈エ〉(S)、〈へ〉(S):〈伊〉(D)・・・「ぢや」「うず」
- 〈エ〉(A)、〈へ〉(A):〈伊〉(B)・・・「やうなり」
- 〈エ〉(A)、〈へ〉(A):〈伊〉(D)・・・「なんだ」

###### (4) 〈伊曽保〉〈ヘイケ〉で基幹語彙であるが〈エソボ〉でそうでないもの

なし

###### (5) 〈エソボ〉でのみ基幹語彙のもの

- 〈エ〉(A):〈伊〉(B)、〈へ〉(B)・・・「まじ」

(6) 〈伊曾保〉でのみ基幹語彙のもの

〈伊〉(S):〈エ〉(B)、〈へ〉(B)・・・「べし」

〈伊〉(S):〈エ〉(D)、〈へ〉(B)・・・「けり」「ぬ」

〈伊〉(S):〈エ〉(D)、〈へ〉(C)・・・「ん(む)」

〈伊〉(A):〈エ〉(C)、〈へ〉(B)・・・「き」

〈伊〉(A):〈エ〉(D)、〈へ〉(C)・・・「り」

(7) 〈ヘイケ〉でのみ基幹語彙のもの

なし

上記の分類のうち、(1)(2)(3)(6)について検討する。

#### 4.2 全部で基幹語彙のもの

〈エソボ〉〈伊曾保〉〈ヘイケ〉に共通に存するのは20語で、そのうち、全部で基幹語彙のものは7語である。これらは平安時代から用いられているもので、室町時代末期から江戸時代初期において、書き言葉としても話し言葉としても極めてよく用いられたものである。しかし、用法に相違がある。それを「す」「さす」で見ることにしてしよう。

「す」「さす」は、〈エソボ〉で「らる」が続いて「せらる」「させらる」の形で尊敬の表現となる。

(1) その人の言ふは、「もし飲み尽くさせられずは何と」と。(〈エ〉417-21)

この部分に対応する〈伊曾保〉の本文は次のように「給ふ」になっている。

(2) かの人かさねていはく、「もし飲み給はずは、なに事をかあたへ給ふべきや」といふ。  
(〈伊〉369-4)

〈エソボ〉の「す」(全部で72例)の未然形61例のうち、使役の意味を表すのは1例で、「せらる」の形で尊敬の意味を表すのが60例である。また、「さす」(全部で29例)の未然形は28例で、すべて「させらる」の形で尊敬の意味を表している。

〈伊曾保〉では「す」「さす」に「給ふ」が続いて「せ給ふ」「させ給ふ」となる。

(3) ある時、しゃんといそほを召しつれ、墓所を過ぎさせ給ふに、(〈伊〉370-12)  
この部分に対応する〈エソボ〉の本文は次のように「る」になっている。

(4) ある時シャントエソボを連れて墓所へ赴かるに、(〈エ〉419-3)

〈伊曾保〉の「す」(全部で60例)の連用形53例のうち、使役の意味を表すのは6例で、「せ給ふ」の形で尊敬の意味を表すのが47例である。また、「さす」(全部で31例)の連

用形24例のうち、使役の意味を表すのは1例で、他は尊敬の意味を表す。そして、21例が「させ給ふ」の形をとっている。

〈ヘイケ〉では〈エソボ〉と同様、「す」「さす」に「らる」が続いて「せらる」「させらる」の形で尊敬の表現となるものが多い。

(5) 後に立たせられて皇子を御誕生あつて後には建礼門院と申した。(〈ヘ〉 13-1)

(6) 近衛の院のおん時、夜な夜な怯えさせらることがあったによって、

(〈ヘ〉 140-21)

〈ヘイケ〉の「す」(全部で514例)の未然形412例のうち、使役の意味を表すのは8例で、「せらる」の形で尊敬の意味を表すのが404例である。また、「さす」(全部で254例)の未然形231例のうち、使役の意味を表すのは3例で、「させらる」の形で尊敬の意味を表すのが228例である。

(7) 雑人ばらを遣はいて、柵を切り破らせられい。(〈ヘ〉 162-23)

(8) (重盛は)重の字をば松王に下さるとあつて、重景と名のらせられた。

(〈ヘ〉 313-17)

(7)(8)のように、「せらる」「させらる」の形で「使役一尊敬」の意味を表すのは「す」が2例、「さす」が3例である。ただし、「す」「さす」を尊敬と解釈できる例もある。また、(8)の例は四段活用に「さす」が接続しており、「せさせ」からの転化とも考えられる。

#### 4.3 〈エソボ〉〈伊曾保〉で基幹語彙のもの

〈エソボ〉〈伊曾保〉で基幹語彙であるが〈ヘイケ〉でそうでないものは「ごとし」である。「ごとし」は体言ゴトに形容詞化する接尾辞シの付いた語で、助動詞とみなさない説もある。平安時代には漢文訓読系の文脈で「ごとし」、和文系の文脈で「やうなり」を用いるという使い分けがあった。3作品の「ごとし」と「やうなり」の使用率とランクを取り出して示すと次のようになる。

表7 〈エ〉〈伊〉〈ヘ〉の「ごとし」と「やうなり」

	〈エソボ〉	〈伊曾保〉	〈ヘイケ〉
ごとし	12.91% (A)	40.85% (A)	2.29% (B)
やうなり	10.84% (A)	5.21% (B)	11.38% (A)

「ごとし」は〈エソボ〉〈伊曾保〉とも(A)ランクであるが、使用率に大差があり、

〈伊曾保〉での使用が多い。また、〈ヘイケ〉で(B)ランクであるが、使用率は(C)ランク寄りの数値で〈エソボ〉〈伊曾保〉との差は大きい。一方、「やうなり」は〈エソボ〉〈ヘイケ〉とも(A)ランクで、互いに近い使用率を示しているが、〈伊曾保〉は(B)ランクである。これらのことから次の点が指摘できる。

[a] 室町時代末期から江戸時代初期において、口語で「やうなり」が多用され、文語で「ごとし」が用いられた。

[b] 文体が口語であるか文語であるかにかかわらず、〈エソボ〉〈伊曾保〉の二作品を特徴づける助動詞は「ごとし」である。

以下で二作品の「ごとし」の用法を見ることにする。

「ごとし」は〈伊曾保〉で「そのごとく」という定型の語句の後に、寓話の教訓を述べるのに用いる。動物のたとえを用いて事柄を記し、それを人間の社会に置き換えて人生訓を導き出す。よく知られた短い章段を以下に引用する。

(1) ある犬、<sup>しむら</sup>肉をくはへて河を渡る。まん中ほどにてその影水に映りて大きに見えければ、「わがくはゆる所の肉より大きなる」と心得て、これを捨ててかれを取らんとす。かるがゆへに、二つながら是を失ふ。

そのごとく、<sup>ともがら</sup>重欲心の輩は、<sup>たから</sup>他の財をうらやみ、<sup>むさぶ</sup>事にふれて貪る程に、たちまち天罰をかうむる。わが持つ所の財を失う事ありけり。 (〈伊〉405-11)

〈エソボ〉では、教訓が「下心」という語の後に述べられる。「下心」は話の下に隠れている意味という意を表す。上記の章段に対応する〈エソボ〉の本文の「下心」以下は次のようである。

(2) 下心。 <sup>とんよく</sup>貪欲に引かれ、<sup>ふちやう</sup>不定なことに頼みを掛けて我が手に持った物を取り外すなといふことぢゃ。 (〈エ〉445-21)

〈伊曾保〉の「ごとし」102例のうち、連用形の「ごとく」は90例である。そのうちイソップの生涯を除いた寓話部分(中下巻、全部で64章段)で、「そのごとく」という形でその章段の教訓を導くのは59例である。

〈エソボ〉では〈伊曾保〉のように「そのごとく」を多用することはないが、「下心」と「そのごとく」の両方を用いて教訓を導いている章段がある。

(3) 下心。 そのごとく憂き時、つれぬ友をば友とするな。 (〈エ〉471-9)  
ただし、〈伊曾保〉に対応する章段が存在しないので、本文の比較ができない。

続いて、このような寓話部分で教訓を導くのに用いられる「そのごとく」を除き、

「ごとし」の用法を整理しよう。

〈エソポ〉の「ごとし」は次のようである。

[a] 同一であることを示すのに用いる。

(4) 我昨日の約束のごどく、海の水をことごとく飲み尽くさうず。 (〈エ〉 418-17)

[b] 類似であることを示すのに用いる。

(5) この難をお助けあらば、水と魚のごどく親しみませう。 (〈エ〉 447-6)

[c] 活用語に接続する場合、格助詞「が」をはさみずに連体形に付く。

(6) エソポが仕業をもって仲をたがはれた(0)ごどく、またエソポが巧みをもって  
仲直りせられた。 (〈エ〉 425-13)

[d] 慣用句的に用いる。

(7) シャント帰宅して女中に向かうて、例のごどく、言葉を掛けられるれども、  
(〈エ〉 422-5)

[e] 地の文でも会話文でも用いる。

上記のうち、(4)(5)の例は会話文、(6)(7)の例は地の文である。

「ごとし」を含む複合語の「ごどくなり」9例、「ごどくちや」7例の用法にも[a]  
[b][c][e]があてはまる。

〈伊曾保〉の「ごとし」を〈エソポ〉と比較すると、[a][b][d][e]の用法が一致するが、次の点が異なる。

[c]' 活用語の連体形に接続する場合、格助詞「が」をはさむことが多い。

(8) かれが返答は、ただ魚の島をめぐるごどく。 (〈伊〉 362-15)

[f] 人、あるいは人に見たてた動物や物、それらを表す代名詞に付いて軽侮する。

(9) 汝らがごどくの物は、従へても事の数にならぬは。 (〈伊〉 422-11)

活用語の連体形に接続する「ごとし」は14例で、そのうち「が」をはさむのが10例で、はさまないのが4例である。前者は地の文に8例、会話文に2例存する。後者はすべて地の文に存し、「動作主体+格助詞がまたはノ+連体形+ごとし」の形式をとっている。

(10) いそ保が云(0)ごどくよばはりけり。 (〈伊〉 374-14)

[f]の用法の用例に対応する部分を〈エソポ〉の本文で調査した。すると、対応する章段が存しないか、章段があっても対応する語句が存しなかったり、異なる言い回しであったりした。その結果、〈エソポ〉で[f]の用法を見ることはなかった。

「ごとし」を含む複合語の「ごどくなり」9例のうち、章段の教訓を導くのに用いられる「そのごどくに」は2例である。それを除いたものに[a][b][c]の用法があてはまる。



[e]については会話文の例が1例のみで、他は地の文の例であることを記し留めておく。

以上をまとめると次のようになる。

- (a) 室町時代末期から江戸時代初期において、口語で「やうなり」が多用され、文語で「ごとし」が用いられた。
- (b) 文体が口語であるか文語であるかにかかわらず、〈エソボ〉〈伊曾保〉の二作品を特徴づける助動詞は「ごとし」である。
- (c) 〈伊曾保〉で「ごとし」がとくに多いのは、「そのごとく」という定型の語句が寓話章段の教訓を導くことによる。
- (d) 〈エソボ〉の「ごとし」は同一・類似であることを示すのによく用いられ、地の文にも会話文にも見られる。その点は〈伊曾保〉も同様である。
- (e) 活用語の連体形に接続する場合、〈エソボ〉は格助詞をとらないが、〈伊曾保〉は格助詞をはさむことが多い。
- (f) 〈伊曾保〉には人、あるいは人に見たてた動物や物、それらを表す代名詞に付いて軽侮する用法がある。〈エソボ〉にこの用法は見られない。対応する章段が存しないか、章段があっても対応する語句が存しなかったり、異なる言い回しであったりする。

#### 4.4 〈エソボ〉〈ヘイケ〉で基幹語彙のもの

〈エソボ〉〈ヘイケ〉で基幹語彙のものは6語であるが、その中でも〈伊曾保〉で(C)ランクか「不使用」のものは5語である。これらを意味の上で分類すると、過去・完了「た」「なんだ」、推量「う」「うず」、断定「ぢや」の3種になる。これらは室町時代末期の話し言葉で極めてよく用いられたものである。このうち、「た」「う」は〈伊曾保〉に1例ずつ用例が存する。「た」は会話文、「う」は心内文で使われている。

(1) をのをの口をそろへて、「見た事も聞き奉る事もなし」といひければ、  
(伊) 397-4

(2) 蟻心に思ふやう、「ただ今の恩を送ら<sup>(註12)</sup>ふを」と思ひ、  
(伊) 442-6

(1)に対応する〈エソボ〉の本文は次のようである。「かつて」が「た」の意味を担っている。

(3) 各々「かつて以て見、聞かぬことござる」と申して、  
(エ) 441-5

(2)に対応する〈エソボ〉の本文は次のように「うず」になっている。

(4) かの蟻只今の恩賞を報<sup>う</sup>ずると思ふたか、  
(エ) 469-10

#### 4.5 〈伊曾保〉でのみ基幹語彙のもの

〈伊曾保〉でのみ基幹語彙のものは6語であるが、中でも〈エソボ〉で(C)ランクか「不使用」のものは5語である。これらを意味の上で分類すると、過去・完了「き」「けり」「ぬ」「り」、推量「ん(む)」の2種になる。これらは平安時代からよく用いられてきたものであるが、室町時代末期から江戸時代初期には書き言葉であった。このうち、「き」は〈エソボ〉に1例見られるが、「エソボが生涯の物語略」という章段名の直後におかれ、書物の来歴を示した部分に使われている。

(1) これをマシモ＝パラヌデといふ人、ゲレゴの言葉よりラチンに翻訳せられしものなり。 (〈エ〉409-5)

前節にあがった助動詞も併せて意味の上で分類して示すと、次のようになる。

表8 〈エ〉〈へ〉で基幹語彙、〈伊〉のみで基幹語彙の助動詞の意味による分類

助動詞の意味	過去・完了	推量	断定
〈エ〉〈へ〉で基幹語彙	「た」「なんだ」	「う」「うず」	「ちや」
〈伊〉のみで基幹語彙	「き」「けり」「ぬ」「り」	「ん(む)」	

新たに成立した助動詞が話し言葉として多用されるようになり、旧来の助動詞が書き言葉の世界で用いられるという使い分けがなされたことが、基幹語彙という観点から数値の上で明白になった。

ところで、日本語の学習をするためのテキストとして作成された〈エソボ〉と〈ヘイケ〉との間で、〈エソボ〉で(C)ランクの「き」が〈ヘイケ〉で(B)ランク、〈エソボ〉で「不使用」の「けり」「ぬ」「ん(む)」が〈ヘイケ〉で(B)や(C)ランクというように、使用量に相違があるのはどうしてだろう。〈高野本〉の助動詞を同じ基準で分類し、これらの5語のランクを示すと次のようになる。

〈高野本〉(S)・・・「き」「けり」「ん(む)」

〈高野本〉(A)・・・「ぬ」「り」

これらは〈高野本〉で基幹語彙であり、作品の骨格をなす助動詞である。〈ヘイケ〉はイエズス会の宣教師たちが日本語と日本の歴史とを学習するために編集された。歴史を扱うからであろうか、あるいは古い雰囲気を出すためであろうか、〈ヘイケ〉には原拠にした平家物語の言葉が残っている。

## 5 助動詞の特色

〈エソボ〉と〈伊曾保〉〈ヘイケ〉の助動詞とを異なり語数・延べ語数という観点から比較した結果、次の点が明らかになった。

(ア) 異なり語数・延べ語数ともに、室町時代末期の話し言葉を使用している〈ヘイケ〉がもっとも多く、同様の〈エソボ〉がもっとも少ない。話し言葉を含んだ文語の〈伊曾保〉がその中間にある。1語あたりの使用度数でも〈ヘイケ〉が多く、〈エソボ〉が少ないが、〈エソボ〉と〈伊曾保〉とは近い数値である。

(イ) 〈エソボ〉〈ヘイケ〉の助動詞を、作品の規模との関係で見ると、助動詞の1語あたりの使用度数は作品の規模に比例する。

(ウ) 1ページあたりの助動詞の使用度数を計算すると、〈エソボ〉は20.61、〈ヘイケ〉は27.93となり、〈ヘイケ〉の方が多くなる。〈エソボ〉は〈ヘイケ〉に比べて助動詞の使用が少ない。

〈エソボ〉〈伊曾保〉〈ヘイケ〉〈高野本〉の助動詞の使用語彙を比較した結果、次の点が明らかになった。

(エ) 〈エソボ〉〈伊曾保〉に共通に存するのは「る」「らる」など20語である。これらは〈ヘイケ〉にも存する。室町時代末期の口語的文脈でも文語的文脈でも用いられた語群である。

(オ) 〈エソボ〉にあって〈伊曾保〉に存しないのは7語で、すべて〈古語〉に掲載されていない。「うず」は比較的早い時期に用いられるようになったが、口語的文脈が主であったと考えられる。「であ」は〈エソボ〉固有のもので、「ぢや」に転じる過渡期の語形である。「らう」「まい」「ぢや」「なんだ」「ごとくぢや」の5語は室町時代末期の口語的文脈でよく用いられた語群である。

(カ) 〈伊曾保〉にあって〈エソボ〉にないのは「しむ」「ぬ」など14語である。そのうちの11語は〈ヘイケ〉〈高野本〉にあり、〈古語〉にも掲載されている。これらは文語的文脈での使用が主であろうと考えられる。残りの3語のうち「げな」は〈ヘイケ〉にもあり、〈伊曾保〉の文語を基調とした中の口語性を示すものである。「むず(んず)」は〈高野本〉にもあり、〈古語〉に掲載されている。「てんげり」は〈高野本〉にあり、軍記物語や説話によく用いられたが、室町時代には文語的文脈での使用が主になったと考えられる。

(キ) 〈エソボ〉〈伊曾保〉二本に共通して存しないのは「ようず」「まじかなり」など7語で、すべて音韻変化を伴う複合語である。

ある言語資料を対象とした語彙調査を行った場合に得られる、骨格的部分集団を「基幹語彙」と呼ぶことにし、基準を設定して〈エソボ〉〈伊曾保〉〈ヘイケ〉の助動詞の基

幹語彙を抽出した。それらを分類し、比較した結果、次の点が明らかになった。

- (ク) 全部で基幹語彙の「ず」「らる」「す」など7語は、平安時代から用いられているもので、室町時代末期から江戸時代初期に書き言葉としても話し言葉としても極めてよく用いられたものである。しかし、用法には相違がある。
- (ケ) 文体が口語であるか文語であるかにかかわらず、〈エソポ〉〈伊曾保〉の二作品を特徴づける助動詞は「ごとし」である。しかし、その用法には相違する部分もある。
- (コ) 〈エソポ〉〈ヘイケ〉で基幹語彙であるが、〈伊曾保〉で(C)ランクか「不使用」のものは、過去・完了「た」「なんだ」、推量「う」「うず」、断定「ぢや」の5語である。これらは室町時代末期の話し言葉で極めてよく用いられたものである。
- (サ) 〈伊曾保〉でのみ基幹語彙であるが、〈エソポ〉で(C)ランクか「不使用」のものは、過去・完了「き」「けり」「ぬ」「り」、推量「ん(む)」の5語である。これらは平安時代からよく用いられてきたものであるが、室町時代末期から江戸時代初期には書き言葉であった。〈ヘイケ〉には原拠にした平家物語の言葉が残っている。

#### 〈注記〉

- 注1 森田武(1965)は「異本と称すべきものはないと言えよう」とし、上巻の「第一本国の事」の条に「そのうへ才かく又ならふ人なし」とあるものと、「そのうへ」の代わりに「然共」とあるものとを区別し、「そのうへ」系と「しかれども」系とした。
- 注2 遠藤潤一(1987)は「古活字本祖本の原典はSteinhöwel集のロマンス語訳本であったと考えられる」とし、天草版の編者は「古活字本祖本に依拠した編集を続け、その古活字本祖本にイソップ寓話としては異質な話が登場する辺りに差し掛かって古活字本祖本の利用を断念し、初めから用意していたラテン語本に依拠しての編集に切り替えたのではないであろうか」とする。
- 注3 助動詞「らる」に係する例をあげよう。『エソポのハプラス本文と総索引』で自立語索引に見出し語「させら・る〔尊敬〕」がある。これは下二段動詞「さす」の未然形に助動詞「らる」が付いた形である。本研究では二語と認定した。また、付属語索引に見出し語「させらる(助動詞・尊敬)」「せらる(助動詞・尊敬)」がある。それぞれ助動詞「さす」の未然形に助動詞「らる」、助動詞「す」の未然形

に助動詞「らる」が付いた形である。これらも二語と認定した。付属語索引の見出し語「らる（助動詞）」に掲げてある用例の中に、上記の「させら・る〔尊敬〕」「させらる（助動詞・尊敬）」「せらる（助動詞・尊敬）」は重複して挙げていない。そこで、これらの見出し語に含まれる「らる」も合わせて計算し直し、助動詞「らる」の使用度数を求めた。

注4 『仮名草子伊曾保物語用語索引』では助詞の中に助動詞や活用語の語尾等を入れている。そして、助詞の中に入れたものは助動詞で掲示していない。たとえば、助詞「に」の見出しで、助詞のほかに断定「なり」の連用形、完了「ぬ」の連用形、形容動詞の連用形語尾、副詞の語尾等を区別せずに掲示している。助詞「なん」の見出しで、助詞のほかに、完了「ぬ」の未然形に推量「ん」および推量「んず」の前部が付いたものを掲示している。「んず」の後部は打消「ず」に挙がっている。このほか、助詞「て」の見出しに完了「つ」の連用形、助詞「にて」に断定「なり」の連用形等が掲示してある。本研究ではこれらを助動詞と認定し、整理し直した。

注5 『平家物語』〈高野本〉は覚一本の系統に属する。覚一本は、多数の写本・刊本が現存する『平家物語』の中で語りの正本を志向した伝本である。これは灌頂巻の奥書によって、覚一が口述し、筆記された原本は応安四年（1371年）に完成したことが知られる。この系統は室町時代から江戸時代にかけて広く流布した。〈高野本〉は慶長年間書写の善本で、鎌倉時代の文語を基礎としながら室町時代の語彙も取り込んでいる。計量には『平家物語〈高野本〉語彙用例総索引』（付属語篇）を用いた。

注6 近藤政美・濱千代いづみ（2000）の調査を整理して利用した。

注7 今回は『完訳用例古語辞典』『例解古語辞典』を用いた。現在の学校文法は、昭和22年に文部省により発行された『中等文法』が基準になっている。『中等文法文語』に項を立て、太字で掲載されている助動詞を、順にあげると次のようである。「す さす しむ る らる ず む（ん） じ まほし まし き けり ぬ っ たり〈完了〉 たし けむ（けん） べし まじ らむ（らん） めり り ごとし らし なり たり〈断定〉」「ごとくなり」に関して「ごとし」の後に項を立て、『ごとくなり』は『ごとし』に『なり』の付いたものである。」とする。結合の強さを指摘した記述である。「なり」の項では断定の意味の用法を説明し、その後に項を改めて「動詞の終止形に附いて詠嘆の意味を表わす。」とする。現在、伝聞推定の意味の「なり」としているものである。

注8 「た」「う」は〈古語〉の巻末付録の一覧表に掲載されていない。が、本文には

見出し項目があり、その説明もある。

注9 土井忠生訳『ロドリゲス日本大文典』では「未来の三つの形、上げう、上げうず、上げうずるは話し言葉にだけ使はれるものである」(p.50)とし、「書きことばの活用」で「未来 上げん、ず、る」(p.158)の語形を掲示している。

注10 大野晋(1971)「平安時代和文脈の基本語彙に関する二三の問題」(『国語学』87集)による。

注11 近藤政美(2001)「天草版『平家物語』における助動詞の基幹語彙について—『平家物語』〈高野本〉との比較を中心にして—」(『岐阜聖徳学園大学 国語国文学』第20号)による。

注12 江戸時代前期に「悲しふ」「憐れふ」など「ふ」と書いてムと読む習慣があった。この例に関してもその可能性が考えられる。しかし、〈伊曾保〉では「悲しむ」「あはれむ」のように「む」と書いてあるので、ウと読むと判断した。

#### 〈文献〉

大塚光信・来田隆(1999)『エソポのハプラス本文と総索引』 清文堂出版発行

横山英 監修(1975)『仮名草子伊曾保物語用語索引』 白帝社発行

近藤政美・池村奈代美・濱千代いづみ(1999)『天草版平家物語語彙用例総索引』 勉誠出版発行

近藤政美・武山隆昭・池村奈代美・濱千代いづみ・近藤三佐子(1998)『平家物語〈高野本〉語彙用例総索引』(付属語篇) 勉誠社発行

大塚光信(1983)『キリシタン版エソポのハプラス私注』 臨川書店発行

森田武(1965)校注・解説「伊曾保物語」(日本古典文学大系『仮名草子集』 岩波書店発行)

近藤政美・濱千代いづみ(2000)「天草版『平家物語』の語彙の特色——『平家物語』〈高野本〉との比較による——」 愛知県立大学大学院『国際文化研究科論集』第1号

文部省(1947)『中等文法 文語』 中等学校教科書発行

金田一春彦 監修(1999)『完訳用例古語辞典』初版 学習研究社発行

小松英雄ほか(1992)『例解古語辞典〔第三版〕』三省堂発行

土井忠生 訳(1955)『ロドリゲス日本大文典』 1974年5刷 三省堂発行

遠藤潤一(1987)『邦訳二種 伊曾保物語の原典的研究 総説』 風間書房発行